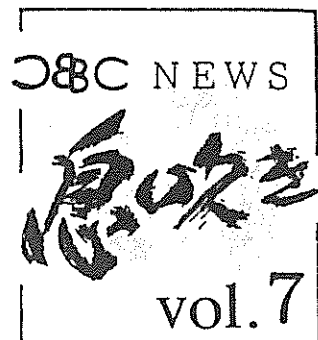


CBCニュース



関東分校が開校したのは、一九八八年である。現在学生二名、聴講生四名が学んでいる。授業は火曜日と金曜日の夕方六時半から九時半まで二科目あり、そのあいだにチャペル・タイムがある。全員東京近辺から通ってくるが、遠い人で約一時間の道のりだ。

夜を照らす、熱気と光

関東分校で学ぶ
奥さんと娘さんも分校に通っていたそうである。それを横目で見ながら、「自分もいつか」とチャンス待っていたそう。ここで学びを教会での奉仕、特に御言葉の奉仕に役立てたいと張り切っておられる。自宅で区域会を開いていたが、その必要に迫られて入学された女性は「ここに来る以前は自分だけで学んでいました。でも参考書だけでは分からなかったんです。どうやって勉強したらいいのかさへ。」と語る。六時半になった。新約概論の授業が始まる。担当講師は青木三徳先生である。会社や家庭の仕事を終えての貴重な時間。学生は真剣な表情で鉛筆を走らせている。

平日のこの時間を確保するのは苦労も多いはずである。会社勤めをされている男性に尋ねてみた。「確かにそうです。

CBCネットワーク

- ・七月に研究科を開催し、Robert Soderberg師の旧約研究を集中講義形式で行った。
- ・十月に太平洋神学協会の認定委員が来日、五日間にわたる認定を受けた。
- ・献身者準備大会（一日入学）を十一月二三日に行い、十名の参加者があった。
- ・卒業式が三月一日に行われ、一四名の学生を送り出した。
- ・一九九六年度教務主任に山城晴夫師を、学生主任および金監に石原嘉宣師を再任、関西分校主任に津村昭二郎師、関東分校主任に山城晴夫師を再任した。
- ・将来構想委員として内村徹母耳、石原嘉宣、久保田潔、D・ハイムス、北野耕一の各師を選任した。

編集

後記

寒さも通り過ぎ、すっかり春らしくなり、外には桜が咲き始めています。

今回は分校を特集してみました。様々な人がいろいろな思いをもって学んでいる分校。いかげすんでいたでしょうか。これからはCBCのいろいろな面を皆様に紹介していきたいと思っています。次回は関西分校を紹介する予定です。

さて、新聞部として活動してこられた四名の四年生が卒業しました。そこでその先生方にこの新聞部での活動を振り返ってもらいました。

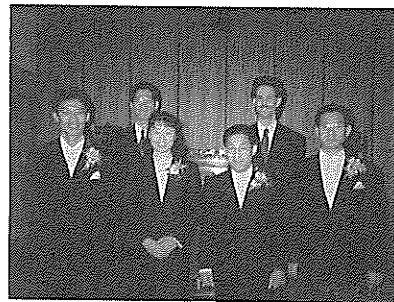
前田謙仕師「新聞づくりはこれからの教会の上で週報づくりや教会案内作りに役立つと思います。」

山田博師「三年間CBCニュースを通して活動できたことを感謝します。これからもCBCニュースが多くの人に

読まれることを期待します。」

野崎晃美師「この三年間、頭のどこかにいつも新聞のことがひっかかっていた。卒業しても投稿しようかしら。」

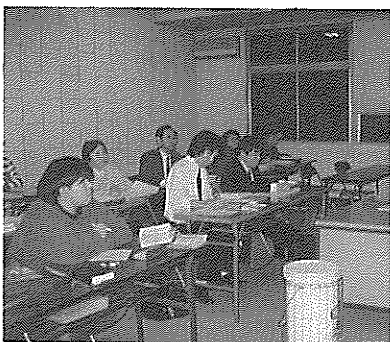
長沢牧人師「とうとう卒業を迎えることができました。様々な企画に携わりましたが、どれもいい思い出です。」



編集責任者 北野耕一師
新聞部部長 別宮健一
ステイブ・ピーターソン

事務局 中央聖書学校
豊島区駒込三二一五二〇
TEL 〇三三九一八四九二五
FAX 〇三三九一八四〇六四

でも私は早く帰社する分、早く出社してつりあいをとっています。」さすがである。



一時間目が終わるとチャペル・タイムである。司会も説教も学生が順番で担当する。今夜は、定年を機に入学された男性（前述）の番である。落ち着いた足取りで黒板の前に立ち、賛美を一曲。そしてエゼキエル書から説教を力強く語る。

八時一五分。教理担当の山城晴男先生がにこやかに教室に入ってきた。外は寒空だが、教室は熱気で満ちている。

(長)

【入会のお願ひ】

中央聖書学校が教団の伝道者養成期間として発足以来、すでに四十六年を数えておりますが、その間多くの方々のご協力と献げ物と奉仕によって幾多の伝道者働き人がこの学舎から輩出されたことは感謝であります。

さらに学校の設備に充実とゆとりのある運営がなされるためには、多くの方々のご賛同を必要としております。どうぞこの点をご理解をいただき、是非本会にご入会くださるよう心よりお願い申し上げます。

中央聖書学校後援会
会長 山田 亘
後援会入会要領
個人会員 一口年五千元
法人会員 一口年一万元

連絡は中央聖書学校内後援会宛にお願いいたします。

静心

神学校では、月曜日の昼食は学生が交代で作ることになっている。献立はカレー。三六人分ともなると材料の量も半端ではない。厄介なのが玉ねぎである。つらくも悲しくもないのに泣かされる。玉ねぎのいでは、やさしい薄茶色で、曲線が美しく、絵画のモデルには好都合である。あの愛想の良い玉ねぎのどこに、こんな刺激物を潜ませているのかと思う。薄い皮を剥ぐと、少し緑がかった綺麗な玉ねぎになる。ちよつとこれじゃあ固いからと、もう一枚剥く。今度は真っ白な面が現れる。こんなものでいいかと、包丁でざくざくと切る。中華鍋で透き通るまで炒める。生のままでは辛いのに、火を通すと甘くなり、全体にコクを与えるようになる。玉ねぎの皮を剥きながらこう思った。玉ねぎのほんとうの姿はどれ？そして本当の私は？

神学校で学ばなければならぬ大切なことは自分自身についてである。自分で、自分について描いていた姿が完全に崩れ去るとき初めて、自分の存在のより深いところまで見入ることができるようになる。大地震のようなものが起こって、表面がぶち壊される。火で精錬されて共同体に調和し、それを支えるような有益な存在になるのである。沈黙する玉ねぎにわたしは問いかける「ひと皮向けたかい？」

(野)

たかどの

このことを追い求めつづける姿勢が、主にある大人の姿なのではないかと思う。そしてこれが、現在の私の目標である。

(ピリピ四・八・九)

「兄弟たち、すべての真実なこと、すべての気高いこと、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての名誉なこと、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。」

のである。

信仰の世界に生きる私達にとって、考えておかなければならない事がある。それは信仰の

カウンスリングを必要とするのは、生活とうまく適用できない人である。また、相談されたとき、それに答えるなら、その人はカウンスラーである。このように、誰もが容易にカウンスラーとなり、カウンスリー(来談者、相談者)となりうるのである。

精神病になったことがなかったなら、精神病者の苦しみを完全に理解することは出来ない。私達は完全に彼らを理解できないと言うことを、謙虚に受け止めなければならない彼ら

みによつてはカウンスラーがいやされない、と言うことである。カウンスラーは、カウンスラーのために祈らなければならぬ。御言も用いなければならぬ。とはいへ、信仰のみによつて、癒されるれると考えるのは誤りである。その病が霊的なものであるなら、イエス様の御名によつて祈るとき、癒されるであろう。しかし、それが精神的なものであるなら、しかるべき治療を受けなければ癒されない。彼を捕らえているのは悪霊ではないからである。彼を捕らえているのは、葛藤、ストレス、幼児期に受けた傷、などである。霊的なものか、精神的なものかを見極めることを私達は要求されている。そして、しかるべき対処をしなければならぬ。

私達は、多くの場合に信仰という価値観のみで物事を判断するきらいがある。信仰は大切である。癒されると信じられなかったら、カウンスリングなど続けられない。また、信仰のないカウンスリングも空しい。しかし、自分が信じているから、相手がクリスチャンであるからといって、むやみに伝家の宝刀のごとく信仰を振り回しているのはあくまでも刀であり、それは人を傷つけているだけかも知れないのだから。

基礎B 後登雅博

信仰とカウンスリング

夜を照らす 熱気と光

中川 数也



私は、神様の恵みの中に関東分校を三月に終了しようとしています。会社の勤務を終えてから、中央聖書学校へ四年間週二回通いました。授業は、夜六時三十分始まり、九時三十分までです。仕事をしながら通学することは、忙しい時など大変でした。授業がある日は、残業をすることが出来ないで、会社の人より早く出勤して授業に間に合うように仕事を済ませたこともあります。

忙しい中でも四年間学ぶことが出来たのは、興味深く教えて下さった先生方と年代が異なり、異なった教会から通われて来る兄弟姉妹の交わりに支えられたからだと思います。

授業以外でも、年二回福音集

会に賛美と証しで参加して、神学生の方々の交わりを持つことが出来たことは良かったと思います。

教会奉仕者コースを終了しますが、教会において、日曜学校での成人科クラスでの学びや福音を伝える奉仕において、ここでの学びを役立てたいと思います。

一ノ倉 豊



主の御名を賛美いたします。

私は二年前、主の恵みと憐れみにより救われました。関東分校で学ぶ機会を与えて下さった主に感謝します。皆様のお祈りをありがとうございます。

「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益で

す。」(IIテモテ三の一六)

私が、関東分校に入学するきっかけとなったのは、この神の言葉である聖書について深く知りたいと思ったからでした。

しかし、仕事の都合上、交替制勤務の為、夜間の学校に通うのは無理があると思いました。幸いにも、職場の上司の理解が得られ、勤務時間の調整をして頂くことができました。

与えられた時間を無駄にすることの無いよう、一つ一つの学びを確実に身に付けて行きたいと思います。

今後、人事異動などでこの学びを継続していくことが出来るかどうかは分かりません。ただ、主にすべてを委ねていきたいと思います。この学びが、主の栄光を表すものでありますように。どうぞ、未熟な者ですがお祈り下さい。

北林 弘子



一九九四年五月九日が私の分校生活の始まりとなりました。米国の神学校への入学を予定していましたが、先方からの通知が遅れたため準備が間に合わず、しかし心の中にはどうしても聖書を今、学びたいという思いがありましたので、夜間での学びすることに決めました。

会社と学校の二足のわらじがスタートし、今年四年目を迎えます。火曜日と金曜日の週二回の授業ですが、一年目は期待と学生になった喜びで、大変なことは感じなかったのですがレポート提出が度重なるにつれてしんどく思うこともありますが、提出後はまた一つ学べた思いで満足もするのです。

夜を照らす、熱気と光



仕事の都合で学校に行けない時もあります。なるべく出席できるように普段の仕事も工夫しています。

学校に通うようになって会社生活も張りが出たように感じます。時間に余裕のない分、ときどきとこなしていかないとすべてが中途半端になってしまふのです。

現在家庭集会を月に一度持っています。今の学びがこのようになさな集まりや会社生活で生かしていけるようにと望んでいます。

シリーズ 献身

Vol. 7

一九九七年度学生会会長
船津信成

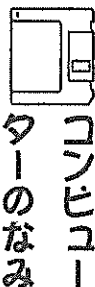
池の縁に静かに映く桜。もう、こんな季節になったのかと思わせる。あと数日で先輩たちは、日本各地に出ていく。キリストの大使として、福音を携えていく。何と大いなることであり、崇高なことである。この中央聖書学校で送った日々は、まさに伝道者になるための訓練である。大きな希望と、小さな不安は、やがて偉大な神の国の建設へと導く。この不安は、人間に対する恐怖ではない。神のなされることへの畏れである。ここに我々は、神の宣教師としての使命を全うするために、生を受け、そして遣わされていく縮図を視る。行く手に待ち構える困難があっても、羊飼いなる主がみどりの牧場に我らをともなってくれる。それを信じていくことができるか。

本当に主は導いてくださるのか。平和と祝福のときではなく、死の谷を歩く時にこそそう思えるか。献身の道は決して安易なものではないということ。我々は未だアマチュアである。プロではない。しかし、情熱はある。燃える闘志。熱い志。どんな神学よりも、どんな教会堂よりも、どんな地位よりも、これらを失いたくはない。主への忠誠を。我らのために流された血の丘ゴルゴダ、いつも我らの前に進む。それは勝利の証であり、信仰の礎石である。彼は我らを裏切ることには決してない。だから失望させられることはない。ゆえに一本橋を渡るときも我らは主を信じていくことができる。

私は、この中央聖書学校を誇りに思う。そして、我らの後に続く者をも教え鍛える我が学舎、中央聖書学校。ここに「献身」が在る。

「ウィンドウズ九五」

この言葉は最近よく耳にするコンピュータ・ソフトの用語である。最近のコンピュータ・ブームは目を見張るものであるが、その波が今、学生生活の中にも浸透してきている。四、五年前までは、ワープロを一部の学生が使用していた程度であったのが、ここ一、二年の間に、ほとんどの学生がワープロとなり、



コンピュータのなみ

全学生の四一%がコンピュータに切り替わっているという現状である。(男子学生が六三%、女子学生は一%である。)これは図書室にコンピュータが導入されていることやワープロに比べて編集機能が豊富であり、(将来的に)いろいろな用途に使えることや価格が安くなってきたことが要因と言える。

(山)

たかどの

中央聖書学校開校以来、続いているものに、『たかどの』がある。

『たかどの』の目的、意義。それはそのテーマに対するその人の主張がそこに現れているという事である。その時何を思い、何を感じていたのか。その足跡を残すことは後に続く者にとつての励みにもなります。また、読む人が、その人の普段の生活からは知ることができない面を知ることができ、そのことによつて、お互いに啓発しあい成長することができるといふことである。毎年「テーマ」が決められ、そのテーマについて書く。九六年度のテーマは「自由題」ということでいろんな事を書いていきます。その中の一部を紹介したいと思います。

今、思うこと

専門A 秋川由香利

伝道者の仕事は、永遠の命と肉体の命とに深く関わる仕事であり、その責任は非常に重くと思う。その責任を全うするためには、考え方において大人になる必要があると思う。永遠の命に関することとは、福音宣教と教会を建てることである。肉体の命に関することとは、教会が人々の人生と深く関わり、病氣や死に直面した人々の苦悩に対応することである。とても責任の重い仕事であることを知るとき、私の心は少々重く、軽はずみな言動ができなくなってしまう。

人生、楽しく自由に・・・教会もそうでなくてはいけないのかもしれないが、まだ救われていない、主にある喜びを知らずに滅びにむかう人々、病いや傷による痛みや苦しみの中にある人々、また、死を間近にむかえている人々に目を向けると、するべきことが多くある。しかし、この者にいったい何ができるのであろうか。そういうわけで、いま現在、

備えておくべきこととして三つのことをあげてみたいと思う。まず第一に、神学をしっかりと自分のものとし、他の人に教えることができるようになること。第二に、仕えることを学ぶこと。第三に、主の導きを正確に知り、それを実行することである。それぞれを簡単に説明すると、第一については、様々な新興宗教が盛んな今日、理性と知性を用いて、私たちの信仰がどのようなものであるかを人々に明確に説明する用意が必要であるということ、教会が健全に成長するために必要であるということ。第二については、イエス・キリストを手本とすることであり、人々の生活に関わっていく中でどれだけ仕えていくことができるか、また、人々の喜び、悲しみをどれだけ共有できるかが実際の牧会生活の中で問われてくるということ。第三については、これは伝道者、牧会者にとつて重要なことであり、第一と第二のことを主の御心にそつて成し

ていくために必要である。毎日の生活のなかで培われていくものであり、そのためにいつもへりくだつて主の御心を求め、霊を見分けて何が正しいかを選びとり、怠惰にならずに実行する習慣をつけるということである。

これら三つのことの他に実務的な事として、衣食住に関する事、教会における様々な活動に関する事、教育、医療、法律等々、常識として知っておくべき事も多くある。私の家族は未信者であるせいか、教会または牧師に対する批評はなかなか厳しいところがある。世の中の人は、教会が常識をわきまえたものであり、情緒的にも正常であることを求めている。そういう意味で世の中の常識をしっかりと把握して、世の中でも大人として認められなくてはならない。しかし私たちは、世の中の常識を越えた神の基準による常識を知っている者である。それは、神と人との正しい関係、それに伴う人と人との正